

奥多摩の森

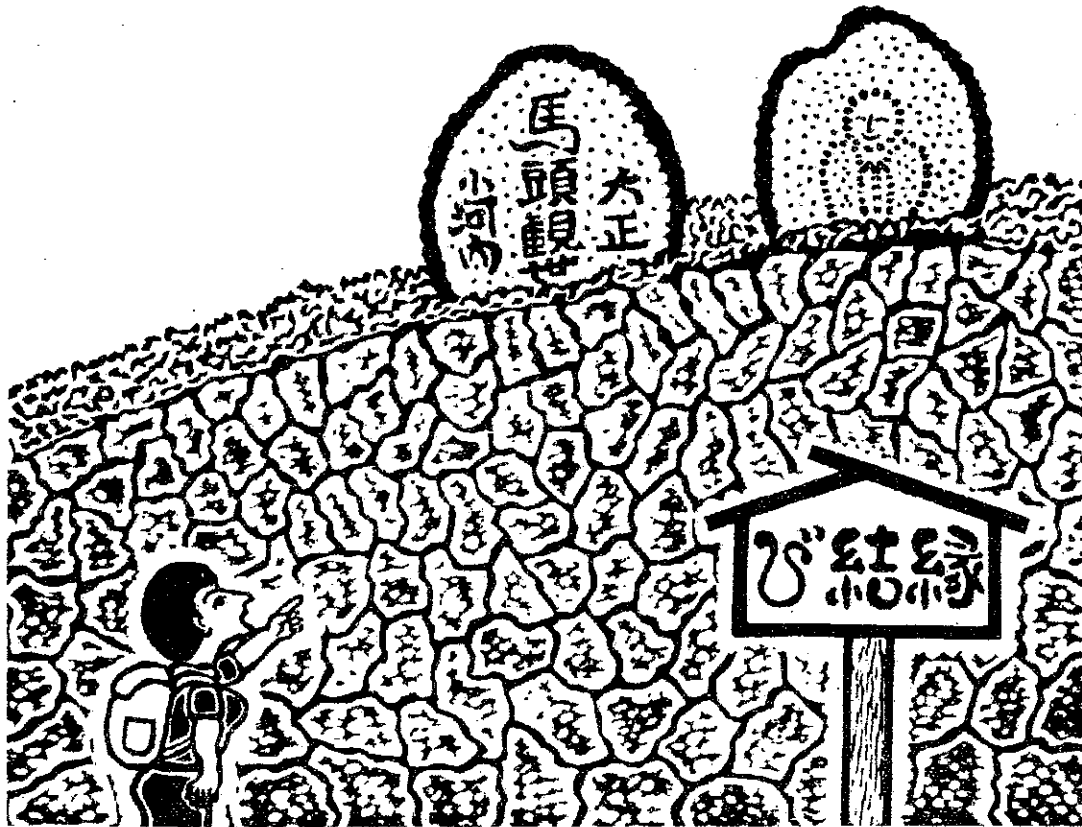


奥多摩

《第31号》

平成25年10月15日

奥多摩観光協会



木版画 安藤修二

～ 奥多摩町の森林は… ～

四国の四万十市で、国内歴代1位の気温41度を観測したのは8月12日。人間の体温よりも4～5度も高く、また35度以上の「猛暑日」は、全国で52日間(7月5日～8月25日)観測したそうである。まさに記録づくめの夏であった。

この暑い中、雲取山や川苔山を訪れた登山者も多く、このため朝の「東日原行」は増車されることが多く、またタクシーも頻繁に「鴨沢」に向かって走ることが多かった。

さて、登山道を歩くと感じる方も多いと思われるが、奥多摩の山、特に人工林は手入れされているところが多く、綺麗と感じる方が多いのではないかと思う。

奥多摩町の面積は22,563haであるが、面積の94%を占める森林面積は21,000haで、人工林と天然林は共に10,000ha強と、仲よく半分ずつとなる。この人工林のうち、東京都の森林再生事業で間伐

を実施した面積は2,933ha(平成25年3月末)、また枝打ち事業を実施した森林は510ha(平成25年3月末)となっており、近隣の山林を持つ市町村と比べると整備が進んでいるといえる。

この森林再生事業がなければ奥多摩町の森林も荒廃が進み、土壌保全や水源涵養機能など、本来森林が持っている機能が低下し、さらに荒廃が進むという悪循環が繰り返されたと思われる。

ちなみに、森林所有者の1番は東京都水道局で、日原鍾乳洞上流から雲取山までの大部分と奥多摩湖周辺、日原北側の都県境から川苔山周辺を所有している。この地域の人工林(日原上流は天然林が多いが…)で整備の行き届いた森林は、東京都水道局の所有で、水道用水源林と思ってほぼ間違いのない。大切な森林を荒廃させてはならない…。

(一般社団法人奥多摩観光協会事務局長加藤博士)

～ どっておきの山歩きガイド ～

鹿倉山 (シシクラヤマ)

奥多摩駅からのバスが倉戸口バス停を過ぎると間もなく、左手前方の山上に仏舍利塔が見えてきます。この山は、丹波山大菩薩みちである鹿倉尾根突端の大寺山 (オオデラヤマ) です。アプローチの少ない奥多摩山歩きの特徴どおり、陣屋バス停登山口からすぐの15分の急登です。その後は、山頂直下の少々急登で、約1時間10分で大寺山山頂です。東京の水瓶奥多摩湖を見下ろす大寺山は、武田信玄の黒川金山時代に、この地に寺院があったために名付けられたものです。巨大な仏舍利塔の前庭に群生していたリンドウは、残念ながら塔の補修の際に掘り起こされてしまいました。大寺山からは、右手に奥多摩最高峰の雲取山から始まる石尾根を散見しながらの尾根歩きが主体になります。道端には、時折可憐なセンブリが姿を見せてくれます。倒木の多い白樺平を過ぎ、カラマツ林に入ると間もなく鹿倉山です。大寺山からの歩行時間は、約1時間40分です。鹿倉山(1,288m)山頂からは、富士山・大菩薩

嶺等の眺望がありますが、樹木が生長して眺めが小さくなってきました。ここから大丹波峠への降り口までの下り道は、足が自然に動き出す心地よい山歩きです。時折見かける檜の若木に巻かれているビニールテープは、鹿の被害防止のためのものです。大丹波峠に降り出すと間もなく、新しく林道が上って来ています。ところどころに残る登山道を目指して下りましょう。丹波山村と小菅村を繋ぐ大丹波峠まで、鹿倉山からの歩行時間は約1時間です。小菅方面に向い、県道18号線に出る手前で、登山道に入ります。車道を歩かずに済む登山道は、山歩き人間にとっては貴重な道です。15分程で県道に出会い、車道歩きになります。平将門の戦場跡・諏訪神社・村営の手洗所のある箭弓神社を過ぎると国道139号線に出ます。すぐ終着地小菅村役場前バス停に到着です。大丹波峠からの歩行時間は約50分です。秋の鹿倉山を楽しんでください。(高野 義男)

山のふるさと村

奥多摩湖の奥、奥多摩周遊道路沿いにあります。かつて、この周辺には、田指とか岫沢などの集落がありました。今は、ビジターセンターをはじめ、宿泊施設やレストラン等があり、通称「山ふる」の名前で親しまれています。近年、奥多摩町が推奨している森林セラピーの専用ロードが奥多摩湖南岸の「いこいの路」に開設され、健康志向で散策を楽しむ人の姿を見かけるようになりました。

今回は、山ふる内の自然観察路を中心に歩きますが、かつては集落があったので神社や石造物との出会いも楽しめます。まずは、ビジターセンター内の展示を見て、解説員(インタープリター)から自然情報や旧集落情報等を聞いて予備知識を得てから園内地図を片手にお出かけください。

お勤めは、西側にある駐車場の上の道「杣の小道」から入ります。ひと登りすると東側が開けたちょっとした展望台地に出ます。苔むした土が心地よく足裏に伝わって来ます。

ぐるり、山中を歩いて山のつり橋を渡ると写真のイタヤカエデの大木が出迎えてくれます。この木に



どんなアクシデントがあったのでしょうか。

いったん管理道路に出るから、旧加茂神社に向かいます。途中に聖徳太子を祀った巨大な石造物があり、住民の信仰心を感じます。

旧加茂神社は、国の無形民俗文化財「鹿島踊り」発祥の神社です。本殿の彫刻を見てください。鼻が長い動物は「猿」。象ではありません。

戻ってから猿田彦大神の文字塔の前を通過して山道に入ります。猿田彦は、道路の安全を司る神として祀られています。この付近は、かつて集落があったところ。立派な石積みはミニの城跡。赤松広場から鷹ノ巣山を遠望してから下ると、そこはクラフトセンター。元に戻ったのです。歩き方次第で1~2時間の散策コースです。山ふるには、コウガギクの大群落や追羽根に似たツクバネ、樹木のタカノツメ等々、植物は豊富です。(岡崎 学)

～ [奥多摩四季] その3 ～

雲取山の「見返り美人」

私が雲取山に初めて登ったのは、昭和42年の夏である。高校生の時に故郷の山、飯豊や朝日、吾妻、蔵王などに登り、山の魅力にすっかりハマっていた私は、東京に出てきて2年目に、初めて東京の山を目指したのである。台東区蔵前にある職場の寮を早朝の5時過ぎに出て日帰りで雲取山に出かけたのであった。

中央線の立川駅でチョコレート色のゴツイ青梅線に乗り換え、終点の冰川駅（奥多摩駅はまだ冰川駅であった）で降りた。バスで東日原まで入り、もう日は高く昇った真夏の日原林道を黙々と終点まで歩いた。

そして長沢を渡るといよいよ登山開始である。大雲取谷沿いの登山道を、初めて登る東京の最高峰に胸を躍らせ大ダブ、雲取山荘と、ろくに休憩もとらずに登り続け、最後の登りで少しバテたが午後2時過ぎに山頂に立った。特別な感慨は湧かなかつたが、久しぶりの山行の喜びと、東京都の最高峰に立ったという充実感があった。遅い昼食を済ますと反対側の鴨沢を目指し一目散に下った。またバスと電車を使い継ぎ、蔵前の寮に帰り着いたのは門限ギリギリの午後11時ころだったと記憶している。東京の東の端から西の雲取山を日帰りで登っていた若かりし日のことを思うと、今はその若さがうらやましく思えてくる。

あれから雲取山には何回登ったことだろう。山岳救助隊の仕事で20年も奥多摩にいるから、正確な記録はないが100回を超えていることは間違いない。仕事も含め、ひと月に8回登ったこともある。丹沢や谷川岳などにもずいぶん通ったが、ひとつの山に100回以上も登ったという山は雲取山だけだと思う。

何度登っても、その時々新しい発見はある。私が雲取山の稜線上に立つ一本の唐松に心引かれ始めたのはいつのことだったろう。たぶん山岳救助隊員となって、盛んに雲取山に通い始めてからのことだと思う。

鴨沢から登りブナ坂に出て、防火帯の稜線を10分ほど雲取山方向に進むと、広い防火帯の真ん中に曲がりくねって立つ、たった一本の唐松がある。その容姿がなぜか私の

心を引きつけたのであった。なぜだろうと考え続け、そして思い当たったのである。この唐松の容姿は、浮世絵の開祖ともいわれる菱川師宣の「見返り美人図」の女の姿だ。江戸前期の最新流行の衣装と髪形に装った女性が、優雅な風情で何気なく振り返った姿を描いた美人画である。

この唐松の幹は柔らかい女体のように、根本からS字状に伸び、枝は円錐形に配され、腰の辺りの枝が帯と長い振り袖のように翻る。先端の方で徐々に短い枝となり長い黒髪の頭がサッと振り返っている。

私は小学校の5年生の時から、そのころ少年の間に流行っていた切手蒐集を始めた。そして欲しかったが高価なため、少年たちには高嶺の花であった戦後まもなくの発売という切手趣味圏外の記念切手、歌川（安藤）広重の「月に雁」と菱川師宣の「見返り美人図」の切手がある。縦長の大型切手で小型シートでも1万円くらいしたのではないだろうか。とうとう少年の小遣いでは買うことができなかった。そんな思い出もあり、「見返り美人図」は私の憧れでもあったのだ。

私は勝手にその唐松に「雲取山の見返り美人」と名付けて、雲取山に行く度に写真を撮り続けてきた。雲取山の遅い春、薄緑色の唐松の芽吹き。秋は黄金に着飾ったなまめかしい姿態。冬はモノクロームで、雪の中に佇む孤高の美人などである。

今年は5月の連休後に鴨沢から登った。「見返り美人」は芽吹いていた。そして無数の花を付けていた。花が小さいから目に留める登山者も少ないと思うが、雌雄同株の唐松は、芽吹きの時期に開花する。雄花が黄色、雌花は薄紅色の小さな花である。稜線で霧に濡れた唐松の花は、目を近づけると何とも愛らしい。これからも四季折々に装いを替え、いつまでも優美な姿を見せてほしいと思っている。私の心の中に住み続ける「雲取山の見返り美人」よ。

(元 青梅警察署山岳救助隊副隊長 ^{こん} 金 邦夫)

秋は、カエデの季節



奥多摩にはイタヤカエデやイロハカエデ等、
数多くのカエデの種類があります。
今や、DNAの時代。植物もDNAで分類
するとカエデ科は、ムクロジ科になります。

奥多摩昔語り

奥多摩町の年中行事 6

正月行事つづき

小正月 十三日 小正月のお飾り

門松を取り払った後へ、門の棒(かどのぼう)を立て、その他、粟穂稗穂(アーボヘーボ)、俵などを作りました。門の棒は、うるし科のカツノ木(ぬるで)の径が15cm、長さ70cmほどに切ったものを、上部の皮を丸く削り、墨で顔や文字を書き、男女一対を飾ります。この門の棒は、悪霊がこの家の屋敷内に入り込まないように祈念するためのもので、朝晩、頭の上に御供え物をあげます。供物は、その家の白い飯や蕎麦やうどん、煮物などでした。

粟穂稗穂は、竹の上部を割って折り曲げ、15cmほどに切った細いカツノ木をさして穂に擬したものを畑の畔などに立てました。

座敷には、石臼を根固めにし、かえで、いぬつげ等の枝ぶりの好いのを選び、これに米の粉やとうもろこしの粉で作った繭玉を刺して座敷いっばいに広がるように飾ります。繭玉は、米の粉の団子が白繭、とうもろこしの粉が黄繭を表します。その他、16繭玉(めえだま)という大きな繭玉を16個と日、月、鶯等の形をしたものや縁起物、蚕卵紙を吊る

しました。繭玉飾りは、養蚕農家にとって大事な行事で、良質の繭が沢山できることを祈念するものでした。

奥多摩地方でも江戸時代から養蚕が行われていた記録があり、明治の中頃から盛んに行われるようになりました。

蚕は、頭に馬蹄形の斑点があり、これがオシラ神伝説の基になっているものです。「昔、或る田舎に父と娘とがあつて、其の娘が馬に嫁いだ。父はこれを怒って馬を桑の木に繋いで殺した。娘は其の馬の皮を以て小舟を張り、桑の木の櫂(かい)を操って海に出てしまったが、後に悲しみ死にに死んで、或る海岸に打上げられた。其の皮舟と娘の亡骸(なきがら)とから、わき出した虫が蚕になったという。」(遠野物語・柳田国男)

蚕は、非常にデリケートな生き物で、無事に繭かきが終わるまで、一家総出であたりました。養蚕は、生業としても換金性が高く、農家では、蚕のことを「おかいこ」とか「おこさま」といって大事に扱いました。[資料] 奥多摩町誌、広報おくだま(奥多摩郷土研究会会員 岡部義重)

この木なんの木

—モミジ・カエデ 雑考—

「モミジとカエデはどう違うのですか」とよく聞か

れます。この疑問は、同じカエデのなかまにイロハモミジ、イタヤカエデと呼び方が違う木があることから出たものでしょう。モミジは黄葉や紅葉の漢字を当てるように、本来は、秋に草木が黄色や赤色に変わることを意味する動詞の「もみず」が名詞化したもので、万葉集では黄葉、平安以後は紅葉と多く書かれているようです。草原が秋になって一面彩ることを「草もみじ」といいますし、木の中でとくに目立って色を変えるカエデをモミジというようになったのでしょうか。イロハモミジは紅葉、イタヤカエデは黄葉なので、モミジとカエデを色で分けられると思いきや、イロ



ハモミジはイロハカエデともいうし、ウリハダカエデは黄葉から美しく紅葉することもあり、色はあてになりません。モミジの語源をさぐると、ペニバナ(紅花)を揉んで赤い色を出すのを揉出(もみず)といい、赤く染めた絹を紅絹(もみ)というところからの「もみじ」、一方カエデは葉の形が蛙の手(かえるで)に似ているからというのは、よく知られています。

結局、モミジとカエデの分類学上の違いはなく、いずれもカエデ科です。ちなみに常緑広葉樹のクスノキ、ホルトノキにも紅葉が混じっていることがありますが、これらは老化した葉に見られる紅葉で、環境条件の変化にともなう落葉広葉樹の紅葉、黄葉とは原因が異なります。しかし色素は同じアントシアニンです。最後に「もみじ」と「かえで」が同時に詠まれた歌をご紹介します。

「わが屋戸(やど)にもみつかえるで見ること 妹を懸けつつ恋ひぬ日は無し」(万葉集 1623)

(橋上一彦)

登山・ハイキング会員募集

奥多摩観光協会では、当協会が主催するイベントへの参加者を募集しています。

年会費 1,000 円で年 5 回参加すれば、奥多摩温泉「もえぎの湯」の無料券(700 円相当)をプレゼントし、6 回目の参加費を無料とします。

会員登録は、最初に参加するイベント当日に入会手続きを行ってください。詳しいことは、JR 奥多摩駅前にある観光案内所にお問合せください。

Tel 0428-83-2152

イベント案内

11 月以降のイベントは、下記の 6 回ですが、すべて、「名人・達人観光ガイドの会」のガイドが 3～4 人でご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2 名様まで)を明記の上、当観光協会へお申し込みください。

- No.27 11月6日(水)紅葉の倉沢谷を歩く
日原方面・倉沢林道終点・魚止橋まで
応募締切日 10月23日(ハイキング)
- No.28 11月14日(木)紅葉の鹿倉山を訪ねる
陣屋～大寺山～鹿倉山～小菅
応募締切日 10月31日(登山)
- No.29 11月20日(水)山のふるさと村・
ネイチャートレイルを歩く
峰谷橋～山ふる～蕎麦打ち体験～散策
応募締切日 11月6日(ハイキング)
- No.30 11月22日(金)紅葉真っ盛りの倉戸山
女の湯～倉戸山～水とみどりのふれあ
い館
応募締切日 11月8日(登山)
- No.31 12月3日(火)バードウォッチング
コース未定(お楽しみに)
応募締切日 11月19日(ハイキング)
- No.32 3月12日(水)バードウォッチング
境橋～体験の森～境橋
応募締切日 2月26日(ハイキング)

※今期のイベントのうち、登山に関しては、雨天による中止がいくつかありましたが、大岳山登山は、12月5日(木)に再行予定です。詳細は、右記にお問い合わせください。

施設案内

カフェレストラン SAKA

社会福祉法人ふるさと福祉会が海沢の地に根をおろして25年。故郷・海沢にみんなの憩いの場として平成25年4月1日にオープン。

SAは酒、Kはコーヒー・幸福、Aは Association 交流を意味しています。メニューはハンバーグ、ナポリタン、ハヤシライス等各種。ドリンク、デザートも豊富。

所在地 奥多摩町海沢564

電話 0428-85-8155

定休日 火曜日、水曜日(12月以降検討中)

営業時間 11時～18時(ランチ営業は15時まで)

登山・ハイカーの方々へ

奥多摩むかしみちは、奥多摩駅方面からの入口は水道工事のため、今年度内は利用できません(休日を除く)。駅から歩いて桜村橋の手前(バス停・橋詰)で右折して小中沢方面に向かってください。

蜂と熊情報

今年も注意情報が出ています。オオスズメバチやキイロスズメバチに刺されないための心得として、まずは手を出さないことです。ブーンと飛んで一匹が偵察に来ます。このとき、蜂側から見れば、この人間どもは、自分たち蜂に危害を及ぼす恐れがないと判断すれば飛び去ります。じっとして手を出さなければいいのですが、蜂の巣間近や誰かが蜂を刺激した後では逃げるが勝ち。

次に、熊ですが、奥多摩産のツキノワグマは、冬眠前の活動時期に山里へ出没します。熊にとっても人間が大嫌いなはずですが、出会いがしらの場合、自己防衛本能で襲ってきます。ということで、まずは、彼らの生活圏に入るときは人間の存在を知らせる熊鈴や声を出すことをお忘れなく。

次号発行予定：平成26年1月15日

一般社団法人 奥多摩観光協会

所在地：〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話：0428-83-2152 Fax：0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会